

第9分科会

子どもとともに作り出す “活動と環境”

問題提起園 鹿児島三育幼稚園

問題提起者 野口 千尋

【研究課題】

保育実践

【研究・研修の視点】

保育実践は幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の正しい理解と各園の教育理念を基盤として、子どもの姿に応じながら組織的・計画的に行うものである。幼稚園教育要領の改訂では、幼稚園教育において育みたい資質・能力として、「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」の三つが示されている。これらは、各幼稚園等が子どもの発達の実情や興味・関心等を踏まえながら展開する活動全体によって育まれるものである。

幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねながら、これらの資質・能力を育てていくためには、保育者として専門的な知識や技術を磨くことが重要である。

幼児期の教育及び保育における見方・考え方を生かすには、子どもたちが身近な環境に関わりながらそれらとより面白い関わり方を見い出したり、関連性に気づき意味づけたり、それらを取り込もうとしてさらに試行錯誤したり、考えたり、捉えなおしたりする過程を保育者が受け止め、教材研究を行った、環境との関わり方を深めるように働きかけたりすることが大切である。

また、子どもの発達段階や欲求・素材の価値、幼稚園教育要領等との関わり、子どもたちの発育や活動の発展を促す言葉かけなどについての事前研究、すなわち教材研究を十分に行うことが重要である。

幼稚園教育における保育実践は、幼児理解に基づく指導計画の作成、環境の構成と活動の展開、保育者の援助、評価に基づいた新たな指導計画の作成といった循環（PDCA サイクル）の中で行われるものである。指導計画の作成では、一人一人の発達の実情を捉えた上で、具体的なねらいや内容を設定し、それらが達成されるための適切な環境を考えていく必要がある。そして、環境にかかわって様々な活動を生み出していく子どもたちの姿を捉えながら、保育者はその状況に応じて多様な関わりをしていくことが求められる。

【主な研究・研修の内容と計画】

平成30年4月から適用された幼稚園教育要領、保育所保育指針の改定のポイントとして、子どもたちが主体的に周囲のものや人と関わっていく姿を「学びの芽生え」と位置づけられたこと、幼児教育の積極的な位置づけがなされたこと、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を明確化し、保幼小の連携・接続など学びの連続性が図られたことなどが挙げられる。

したがって本園でも、乳幼児期は学びの出発点であることを再認識し、育みたい資質・能力や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえ、保育の「質」を向上するよう努めていかなければならないと考えた。本園の保育理念に基づき、また新しい幼稚園教育要領、保育所保育指針に沿った保育実践をより良く行うためにどのような工夫をしていくべきか、これまでの保育を振り返り検討を重ねた。

その結果、今までは形式的に行っていた行事や保育の中に、より子ども主体で子ども発信のものを取り入れていくことが必要であると考え、試みることにした。

本園の特色は少人数保育である。そのため、全職員が全園児と関わりを持ち保育を行っている。また、異年齢児で遊ぶ時間も多いため、生活や遊びの中で教え合い、助け合うなど、相手に愛情を持った関わりの中で学びや心情を豊かに育てている。

本研究で取り上げたものは、年長組（ひまわり組）の一人の園児から興味が広がり、その後の行事や保育の中でどのように展開されていったのかの実践事例である。

【研究の概要】

1 研究・研修テーマのとらえ方

本園では子どもたちに“自主性や主体性”をもつてのびのびと行動していくための“たくましく生きる力”を育てたいと考え、子ども発信の保育内容や活動、外部の講師を招き体を動かす楽しさを知るなどの取り組みを進めてきた。

このような取り組みの結果、リズムに合わせて様々な動きを楽しみ、体を動かす機会が増えるなど変化が見られてきた。しかし、自己発揮の面では、まだまだ自分の気持ちを表現できずにいる子どもも多い。また、言われたことはできるが自分から行動することが苦手であるなどの課題もみられる。

子どもと共に創り出す環境構成には、物的環境、人的環境などいろいろな要素がある。子どもは毎日の生活の中で、自然と出会い、人と出会い、ものと出会っている。その時々には子どもは心を動かし、感動し、興味や関心を持って出会いを楽しんでいる。

子どもが興味のあるものをどう引き出し、どのように活動につなげていくことができるのかをさらに研究したい。

2 研究の内容

子どもたちの興味関心を引き出し、行事を子どもとともに作り上げていくにはどのような保育者の働きかけや環境構成が必要かを考える。

3 実践例

(1) 組体操

本園では、毎年運動会で年長組の組体操を行っている。体育遊びの講師と幼稚園教諭が相談し、毎年決まった技を行ってきた。今までの組体操もとても素晴らしく、子どもたちが協力して作り上げていくものであった。令和元年も例年通り組体操の練習が始まったが、「楽しくない」「やりたくない」「つまらない」といった否定的なつぶやきが聞かれた。そこで、子どもたちを集めて組体操をやめて他の何かにするか相談したところ、「組体操をしたい」という答えが返ってきた。



子ども主体の保育とは何かをずっと考えてきたものの、自分の保育を振り返る中で子どもの「やってみたい」を引き出せていないことに気づかされた。今のままでは教師の考えた組体操を押し付ける形になっているのではないかと考え、子どもたちと共に方法を探ることにした。

何かテーマを決めて、組体操を作ってみないかという問いかけに子どもたちは大ききうなずき、何

のテーマが良いかを考えだした。そこで一人の園児が「魚をテーマにしたら」と言った。

はじめはあまり乗り気ではなかったクラスの子どもたちも少しずつ彼の熱意に気持ちが動かされ、いつしかクラス全員で「海の生き物」というテーマの組体操を作り上げていった。

以下はこの組体操がどのようにまとまり、本番を終えることができたのかを、まとめたものである。

園：園児の発言 保：保育者の発言 ★：環境 ☆園児の変化 ●反省

① マグロ

園：「マグロの技、これはどう？」

保：「いいと思う！でも、寝ているだけに見えてしまうかもしれないね。みんなどうしたらかっこよくなると思う？」

園：「マグロは強いから、足と手に力を入れてみたら？」

園：「上に反るとかっこいいね！」

園：「足はマグロの尾びれだから、少し広げるといいね！」

★ マグロの図鑑を持ってきて、初めに考えた技をどのようにしたらよりマグロらしく見えるかをイメージしやすいようにした。

☆ まだ、魚というテーマに対して賛同していない子どももいる。しかし、保育者とのやり取りを近くで見ていることから、興味がないわけではない様子が伺える。



② トビウオ

園：「トビウオもいるよ！」

園：「トビウオってどんなお魚なの？」

園：「トビウオは海の上を羽を広げてジャンプするんだよ！」

園：「飛んでるから、誰かに乗っかるっていうのはどう？」

保：「いいね！」

園：「いいね！」「本当だ！空を飛んでいるみたい！」

保：「それいい考えだね！本当！トビウオみたい！」

★ 園児の持っている図鑑の中からトビウオを探し、一緒に調べた。

★ iPadを使ってトビウオの動画を調べ、園児と一緒に見ることでイメージを膨らませる。

★ 賛同していなかった子どもたちが、近づき意見を言ったときには、真っ先に「いいね！」と発言し、気持ちを汲み取ることでみんなで作り上げられる雰囲気へと導く。

☆ 少しずつ技を考えていくことで、周りの子どもたちも組体操への意欲を示し始めている。

☆ 魚に賛同していなかった子どもたちも、意見を出し合い自分の意見が反映されることで、自然と仲間に加わり、技を考えはじめた。

☆ ほとんどの園児が賛同していたが、あと一人4月から転園してきた男の子がなかなか仲間に



加われずにいた。やりたい気持ちはあるが、素直になれず近くで様子を伺う日々をすごしていた。

- 保育者が真っ先に「いいね！」と言わなかった場合、否定する声や仲間外れにしてしまう発言があったかもしれない。今回の保育者の発言は問題回避にはなっているが、もし問題が起きていたとした場合の、相手の気持ちを考える話し合いや学びの時間をなくしてしまったともいえる。

③ ふぐ

毎年、年長さんの組体操を見てきた子どもたちは、「ブリッジ」を取り入れたいという気持ちがあった。

園：「ブリッジやりたい！」

保：「じゃあ、ブリッジって何に見えるかな？」

園：「うーん。石！」

園：「山」

保：「確かに、石とか山にも見えるね！」「でも、今までお魚の技が決まっているから、お魚の中で似ているのあるかな？」

園：「なんかふぐが膨らんでいるところみたい！」

園：「それ威嚇っていうんだよ。ふぐは敵がくると膨らんで針を出して、逃げていくようにするんだよ」

園：「そうなんだ！すごいね」

保：「へー！さすが魚博士だね！」

園：「じゃあ、ふぐにしよう！」

★ 組体操の技にどのようなものがあるのかイメージしやすいように、保育室の壁に組体操の写真を貼る。その中にブリッジも入っていたため、今回のふぐが生まれたきっかけとなった。

★ 「石」や「山」という発言に対しても否定的な言葉はかけず、魚へとイメージを転換する言葉かけをする。

☆ 毎年行っているブリッジが技に加わったことにより、遊びの中でもブリッジを練習する子どもたちが見られるようになった。

☆ 恥ずかしがって意見を出せずにいた子ども、陰で練習する姿がみられた。



④ くじら

園：「みんなで大きな魚を作るのはどう？」

保：「大きな魚ってどんな魚がいるか知ってる？」

園：「イルカ！」

園：「くじら！」

園：「シャチ！」

保：「じゃあ、今の中で一番大きな魚はどれだと思う？」

園：「くじら！」

保：「じゃあ、くじらにしようか！」

園：「くじらが潮を吹くところ、ジャンプするのはどう？」



園・保：「いいね！」

★ 組体操の一人技だけではなく、2人組や6人組で行った写真を保育室の壁に貼っておくことでイメージを膨らませるきっかけとなった。

★ たくさんの意見が出た場合、クイズ形式にすることで子どもたちも一つの答えを決めることができた。

● クイズ形式にした際、くらべる図鑑などを使って視覚的にも大きさの差を感じ、学びへとつなげていくことができた。

★ なかなか仲間に入ることができなかつた園児に対し、本児が自信と感じている身長に着目し、潮を吹く場所の役をお願いしたいと伝えることによって、自分が必要とされていると感じ、入ることを躊躇していた園児にとっての突破口となった。

☆ くじらの場面で一番背の高かつた園児に潮の役をお願いしたところ、「ジャンプをしたらどう？」と自ら提案をした。このことをきっかけに、この園児も仲間に加わり、全員で組体操を作っていくことになった。

⑤ 太陽・珊瑚

園：「珊瑚って知ってる？」

園：「海にいるごつごつしたのでしょ？」

園：「沖縄の珊瑚、キラキラしてきれいなんだよ」

園：「おひさまが当たって綺麗なんだね！」



★ 魚がテーマになったことにより、お魚図鑑や海をテーマにした絵本や科学絵本を置いておくことでより興味を引き出すきっかけとなった。その中に珊瑚もあり、今回の珊瑚や太陽が出てきた。

★ 例年行われてる組体操の最後の技となっているのがピラミッドと呼ばれる技である。この技の写真も保育室に貼っておいたことで珊瑚をピラミッドで表現することになった。

★ ピラミッドの一番上には誰もが乗りたいという気持ちがあったため、全員で交代して乗ってみることにした。そのことにより、どの場所も大切な役割をもっていることに気づき、一人もかけてはいけないことを知ることができた。

☆ ピラミッドの一番上に一人一人が乗ったことにより、乗ってみたいという意欲が達成されそれぞれの役割を全うすることができていた。

☆ 体をうまく使うことができずに土台を安定させることができず、注意される子どももいたが、様々な場所を経験するで、大切なお友達の命を預かっていることに気づき、意識が変わっていた。

● 園児が珊瑚に着目したところに焦点をあて、絵具で珊瑚を表現して海の中を描いたり、珊瑚の種類や色などを調べたりすることもできた。

⑥ アナウンス

園：「先生！これ物語にしたい！」

保：「いいね！どんな物語がいいかな？」

園：「みんなでいろんな海の生き物に会いに行くのはどう？」



☆ 様々な技が決まっていたが、それぞれがバラバラでまとまりがなかった。しかし、この園児の発言によりアナウンスを入れながら一つ一つの技をしていくことで、物語形式になりまとまりのある演技になった。

☆ アナウンスの言葉もどこに住んでいる生き物なのか、どんな時に威嚇するのかなどを調べながら、子どもたちと一緒に作っていくことで、ともに作り上げていく達成感を感じることができた。

★ 子どもたちの演技を iPad で撮影し客観的に自分の姿を見せることで、どのように映っているのかを確認し、どこを改善したらよいかを一緒に話し合うことができた。

★ チームに分かれて相手のチームの良いところや改善点を話し合った。

● 今回はたまたま、園児の中の発想で物語というものがあったが、水族館のイルカショーなどの動画を見せることによってそのような発想につながることもあると考える。

● 保育者の「いいね！」という言葉かけに子どもたちも賛同し、結果的に保育者が導いてしまっている可能性もあるため、「他にもいい考えがあるかな？」などの言葉かけをすることで、より主体的に行うことができた。



⑦ 運動会当日

みんなで円陣を組んで気合を入れ出発！

担任のアナウンスと体育講師の太鼓に合わせて一つ一つの技を行った。

☆ 当日はいつもに増して気合が入り、みんなで作り上げた組体操であることに誇りをもって取り組む姿があった。6人という少ない人数ではあったが、全員で関わることができたため、諦めずに練習にも励むことができた。終わった後には全員が「楽しかった！」と口々に話していた。

(2) 障害物競争

魚をテーマにした組体操を作り上げる中で、年長の種目である障害物競争においても子どもたちからの「やりたい！」という意見から魚をテーマにして作るようになった。普段からマグロに興味を示し、何種類ものマグ



ロを描き分けていた園児もいたため、大きなマグロを3種類描いてもらい、マグロパズルを作り障害物競争の目玉とした。また、障害物競争の内容もともに考えた。魚がたくさん泳いでいる網をくぐり、釣りをしてから波を越え、マグロパズルを完成させてゴールするというコースが決まった。はじめの網にかかっている魚や海藻も子どもたちの描いた魚を散らすことにした。

★ 魚をテーマにした障害物競争が載っている保育雑誌をもとに、子どもたちに「こんな障害物もあるみたいだよ」と提案した中から選択して作っていった。

★ マグロパズルのマグロや網にかかっている魚を描いてもらうことにより、障害物競争も自分たちで作っているという気持ちになり、楽しんで行うことができた。

☆ 自分で作った魚が泳いでいたり、マグロがパズルになって登場していたりと自ら企画し制作することでより楽しく参加することができていた。

- 途中で出てくる釣りの場面では、子どもたちと相談する時間がなく、保育者が提案したものを行った。もう少し余裕をもって行事に臨むことで、子どもたちの中からよりよい発想を引き出せたと考える。

4 まとめ

本研究は、一人の園児から生まれた魚への興味がクラス全体へと広がり、最初は興味のなかった組体操や障害物競走などの練習にも積極的に取り組むことができた。結果的に一人一人が主体となり、クラス全体で作上げた運動会を行うことができた。このことから見えてきたことをまとめると次のとおりである。

(1) 「やらされる」ではなく「やってみたい」

日々の保育の中にいつの間にか「やらせている」ことがたくさんあるのではないかと感じる。こういった「やらせている」保育をすることで、子どもたちはいつしか自分の考えが出せなくなり答えばかりを求めて、自分で考えることができなくなってしまう。そこに子どもたちを信じて「任せてみる」ことによって見えてくる子どもたちの可能性や「自分で決めた」という喜びや「やってみたい」という意欲を引き出すことができるのではないかと考える。失敗や試行錯誤の連続があるからこそ、驚きや発見があり、仲間と知識や情報を共有したり協力したりする姿もみられた。その先に到達目標ではない、方向性としての幼児期の終わりまでに育ってほしい姿がある。

- ① 自分のやりたいことに向かって見通しをもって主体的に取り組む（健康な心と体）
- ② 組体操を作り上げるにあたり、最後までやり遂げようとする（自立心）
- ③ 大技であるくじらや珊瑚、太陽といった技にみんなで協力して取り組む（協同性）
- ④ 小規模保育であるがゆえに年長さんの姿を見て、小さいクラスの子が真似をしたり、憧れを持ったりするなど、異年齢との交流、保育によって各年齢の子どもたちがお互いに尊重したり、認め合ったりしている（道徳性・規範意識の芽生え）
- ⑤ 魚のことなどをインターネットや図鑑などで情報を取り入れ、情報に基づき判断したり活用したりする（社会生活との関わり）
- ⑥ 自分たちで組体操の技を考え、さらに改良していくにはどのようにしたらよいかなど、考えを展開したり深めたりしている（思考力の芽生え）
- ⑦ 魚などの生き物や植物への関心が高まる（自然との関わり・生命尊重）
- ⑧ 何人でどの技を行うのか、アナウンスの言葉を考えるなど言葉や数字に関心を持つ（数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚）
- ⑨ 仲間に思いを伝えたり相手の考えを聞いたりする（言葉による伝え合い）
- ⑩ 海の生き物をテーマにイメージしたことを組体操によって表現する（豊かな感性と表現）

(2) 子どもと一緒に創造する動的な環境

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は、子どもたちが主体的に遊び、熱中する姿から自ずと引き出される。

令和元年度の年長組の中で魚への興味が広がり、それが組体操、障害物競走へと広がっていった。

これらはすべて偶然の積み重ねや出会いであった。はじめから保育者の保育の意図が書き込まれた指導案ではこの保育の営みは生まれなかった。偶然の出会いや発見、興味関心を引き出し取り入れながら保育を発展していくことが大切である。

子どもとともに作り出す活動は、子どもたちだけで発展していくものではなく、保育者自身も人的環境となり子どもの発見に敏感に反応し、その発見を取りこぼすことなく、共感したり、共有することが大切なのではないだろうか。

5 今後の課題

本園では平成29年度より Facebook を開設し、ほぼ毎日更新をしている。一日一日の保育の中で生まれた子どもたちの気づきや発見、驚きを記事にしたり、そこから発展していった学びや遊びを載せている。また保育記録や日案を見返すことで、様々な場面において、子どもの気づきや学びがあったのだという再発見もあった。しかし、子ども一人一人の活動の記録としては不十分な部分が多くあった。このようなことから、保育の可視化と共有の大切さに気づき、本園では今年度よりドキュメンテーションを取り入れていくこととした。まだ手探り状態ではあるが、すでにその重要性に気づき始めている。毎日の保育の中では様々なことが目まぐるしく起こり、起こった事象も日々の忙しさの中で消えていってしまう現状もあるが、ドキュメンテーションで保育の一片を切り取られることによって、保育者も子どももその事象を振り返り、整理し、心にとめ、また次に進むという作業を日々繰り返すことができている。保育室の一角にドキュメンテーションを貼っておくことで、子どもたちも経験したことや発見したこと、驚いたことなどを改めて振り返ることができ、そこからさらに興味を深めていくきっかけとなっている。ドキュメンテーションの取り組みは、今後もさらに広げていきたい。



<http://youchien.saniku-kago.com/>

